
自分のラブレター

冴川明希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分的ラブレター

【Nコード】

N2548F

【作者名】

冴川明希

【あらすじ】

全国大会からほぼ十年後、手塚は久々にその当時の夢を見た。翌日、越前と会った手塚は他愛無い思ひ出話から、漸く越前への想いを自覚する。多少シリ阿斯。リヨ塚・塚リヨどちらでも読めます。

幸せ？

生意気な、そしてずば抜けて魅力的な後輩は、酔った様な目をしてこう言った。

「何か——あんたが、まだ会った事も無い誰かに恋してるみたいっすね」

朝食を済ませ、午前中のリハビリメニューを半分こなしたところで、休憩。

これがここ・宮崎に来てからの手塚の日常だった。

この日常というものの中にはめりはりが必要である。

と、手塚が決して長くも無いが短くも無い己の人生経験から、そう結論付けたのはごく最近の事だ。

薄いレースのカーテンを横に払うと、開け放した南の窓から強烈な日光が射し込む。その眩しさに一瞬圧倒された手塚は思わず呻いた。幾度か瞬きした後、眼鏡越しに彼の目は漸く外の景色をはつきりと捉える。

青い空と夏を思わせる真っ白い雲。

こここの陽光は東京より絶対にきつい。

彼は窓から見える南国めいたこここの景色に、漸く慣れてきていた。そしてこここの景色に慣れてくると同時に、最近彼自身の思考回路がいつも同じような経路を辿っている事にも気付いていた。

景色に誘発されているとも思わないが、窓の外の強烈な日差しを感じると特に——そういえば昨日もこうして窓の外を眺め、光を浴びながら同じような事を考えていたのだったと気付くのだ。

幸せなまま。

いつも、ずっと、永遠に。

幸せだったらしいね。

とめどなく続く手塚の思考の一端が、白い太陽光に幻惑されてそんなフリーズに触れる。

その途端彼はもう、ここに来てから幾度繰り返したのか判らない事を、飽きもせずと同じ手順で思考しながら組み立てている最中なのだと気付く。それを今朝繰り返したばかりだが、手塚は止めない。手塚にはこの作業が必要なのだ。

今日の明け方近く、手塚は夢を見ていた。

嫌な夢だ。

肩も頭も痛くてボールが打てない。必死に追いつがった先、硬いコートに身体を叩きつけられる。焼けるように痛い。膝や靱帯が気になる。今、捻らなかつたか？今、身体はどこかで変な音がしなかつただろうか。じりじりと照りつける太陽。流れる汗が冷たい。駄目だ。このままでは動けなくなる。もう二度と——

酷い悪寒に襲われ、手塚は自分の喉から漏れた悲鳴に飛び起きた。夢から覚めた証拠を求め、荒い息を宿めながら己の全身をひとつひとつ、震える掌でなぞる。

まだ、大丈夫。肩も腕も脚も——どこも、なんとも無い。ちゃんと動く。

治る。

そして手塚は未だ薄暗い部屋で、幾度目かも判らぬ呪文を低く呟く。
「大丈夫だ」

（別に今、置かれた状況が不幸のどん底というのではない。試合で痛めた肩はきちんとリハビリすれば完治する。一生テニスが出来ない訳でもなく、むしろ怪我を治す機会を与えられ、ケアも万全となれば恵まれた環境であると言って良い。家族を含め周囲の理解者と支援者に恵まれているのだ。それに感謝すべきだ）

手塚はそう言い聞かせる。

一方、それとはまた別のところで、本当に完治するのか、治るにしても大会に間に合うのかといった焦りや不安は常に彼の中にあった。テニスを続ける限り再発の可能性はある。将来プロになって——何年続けられるのか判らないが——もし自分が引退する時は、これが原因になるかもしれないといった漠然とした予感すらも、手塚はもう追い払うことが出来そうに無い。

（それにしたって、マイナス面ばかり、という訳じゃないだろう）

手塚はそうだ、と自身に相槌を打つ。

（逆に言えばこの肩との上手い付き合い方を覚えれば、選手生命をある程度コントロールできる。リスク管理を重点的に必要とする項目を見つけたと思えばいい。更に言えば、それを庇ってまた新たな歪みを生み出さないように、慎重にバランスを取る事が出来れば……ある程度、自分の選手生命というものをコントロールできるんじゃないのか。それは俺の望むべき未来の姿で、多分——幸せなことなんだ）

幸せ。

永遠に幸せだったら。

手塚の思考は果ての無いループを繰言を並べながら落ち続けている。
（永遠の——幸せなんて。そんな砂糖菓子のような理想は、やはり

理想でしかない)

幸せを感じる要素は人それぞれだが、その対象や状況が何であつても『永遠の幸せ』などといった言葉は現実感に乏しい。己を取り巻く人々や環境が幸せであればいいと思つてはいても、そうでない状況が必ずこの世界のどこかに存在する事を手塚は認めている。

いつだって幸せの影には災いが。

災いの影には幸せが。

それぞれが互いにその気配を忍ばせて、その時々になどどちらかの影が強く投影されるのだ。多分多少の年月を生きた人間なら大抵納得しているのではないだろうか。

だからという訳ではないが、と前置きのようなものをして、手塚は思う。

(幸せとは思えない状況でもそう悲観することは無い)
必ず幸いと災いは――頻度や程度がどうであれ、巡り来るものなのだ。

この状況が永遠に続くと思う必要は無い。

(忘れるな、これは努力と時間で変えられるものだ。怖いのはその事実を忘れて、この不本意な現状に慣れきってしまう事だ。言うではないか。人は、慣れる生き物だと)

それは元々、生きていく上での苦痛を和らげるために脳が作り出したシステムのひとつだったのだらう。

どんなに辛い事も、慣れてしまえばある程度やっていけるようになる。与えられた負荷に対し、最初は耐えられないと感じてても何時の間にか平然とやれるようになる。それはテニスの練習のような肉体的な面で発揮される事もあるし、精神的な面で適用されることもある。要はそこでやっていく、生きていく上で避けられないものを、上手く処理するために生き物に与えられた手段だった筈だ。

慣れ——だがそれは、苦痛にだけ適用されたのではなかった。

幸せが続くとそれを当然のものと勘違いし、今幸せなのだということに気付けなくなってしまうことがあるらしい。

（人間は面倒臭い生き物だ。幸せなんだったら幸せなんだと感じ続けられれば良いものを。麻痺していく、だと？）

手塚はしかし、悪態を吐きながらも『慣れ』の恩恵を否定できない。今現在の自分を省みれば、現状に慣れる習性は必要だと理解できてしまう。

人間とは全く厄介な生き物だが、当面手塚はそれをやめる心算は無い。

リハビリをやり遂げる上で、苦痛に慣れるシステムが手塚にはどうしても必要なのだ。

だから——手塚がこの状態に慣れて麻痺してしまわないためには、減り張りが必要だった。今がメリハリの『減り』の状態なら、必ずこの先には『張り』が待っていると信じていなければいけない。

減りと張り。

凸と凹。

良い時と悪い時。

人生には悲しみも苦しみも——つまりは幸せとは対になるような要素を欠くことは出来ない。

幸せだと感じられるのは、そうでない事をちゃんと体験しているから。痛みや苦痛は幸せを感じるために、麻痺させないために必要なものである筈なのだ。

本末転倒なサイクルな気もしないでもないが、生きるということはその繰り返しなんだと開き直れば、まだ麻痺せずに済んでいる事に感謝できるというものだ。

（だから――）

ここまで思考を積み上げて、手塚は漸く知らずに入っていた体の力を緩める事に成功する。

大丈夫。

まだ自分の精神はバランスを保っている。

（気を抜くな）

これは悪い事じゃない。これは辛い事であっても、自分の糧になる。何を悲観することがあるのだ。

（だから）

背筋を伸ばさなければ。

襟を正し、誰にも恥じないでいられるように在らなければ。

こんな所で自暴自棄になつてしまふ訳にはいかないのだ。上手く思考を誘導して、感情の針をマイナスに振らぬように。墮落してはいけない。諦めるな。仲間が待っている。自分が怪我を完治させ、戦列に復帰することを待ち続けてくれる彼らに顔向けできないようになってしまつてはいけない。焦りに目を曇らせてはいけない。この状況に麻痺してしまう前に、あそこに戻らなければ。慣れる前に。

この生活を、日常にしまつ前に。

回想1 i n N・Y・

唐突に目が覚めた。フットライトが照らす薄暗い部屋が、一瞬どこなのか判別できない。飾り気の無い天井、微かな空調音、暗くてパターンの判別できない遮光カーテンの隙間から差し込む一条の白。

(……ホテルか)

咽の渴きを覚えた手塚は、慣れぬ枕が齎した肩の強張りを解しながら身を起した。サイドボードの上の眼鏡を取り上げ、備え付けの冷蔵庫からミネラルウォーターのボトルを取り出して咽に流し込む。そのまま窓に向かい遮光カーテンを開いた。立ち並ぶ高層ビルの姿が少し湿気を含んだ早朝の白い空気の中にあった。見慣れぬ景色に手塚は目を細める。

ここは——N・Y・だ。

朝日に染まる柔らかなピンク色をした空に、手塚は無意識に眦を緩めながら思った。

それにしても随分懐かしい夢を見た、と。

久々に見た夢は彼が中学三年生の時のもの——丁度、関東大会の一回戦・対氷帝戦が終わった後の夢だ。

(もう十年近く前になるのか)

跡部との試合で負傷した肩を全国大会までに完治させる為に、手塚は戦列を一旦離れ宮崎へ向かった。そこでのリハビリ生活で日課になりつつあった彼の「幸せ」についての思考は、手塚にとって当然の様に「必ずこの先があるのだ」という結論に辿り着いていた。何度同じ手順で、同じ思考の積み重ねを繰り返したか知れない。

恐らく手塚は同じ手順を単調に繰り返す事で、「ここにしか行き着かない」と己の導き出した結論を補強し、焦慮をポジティブに誘導

することで自身を何とか保とうと躍起になっていたのだろう。
九州に着いたばかりの頃の手塚はひたすら焦るなと自分に言い聞かせていた。

関東大会は当然強豪が出揃い、激戦になる。手塚は本来なら部長として、その舞台上で青学を全国へと引っ張ってかなければならない立場だ。大和部長との約束もある。

押し寄せる現実を見る度に、手塚は奥歯を噛み締めた。

青学は、自分がその場にいらなくても——必ず全国へ勝ち上がる。
苦しい戦いが続くだろうが——彼らは負けない。

焦るな。

信じる。

そして一刻も早く、あの場所へ。

満足にラケットすら握れなかった数日、手塚は胸の奥がむかむかとして眠れなかった。そうした日々が、手塚に一連の儀式的な「幸せ」についての思考をさせるようになっていたのだ。

（ああ…懐かしいな）

穢れの無い朝の光を浴びながら、手塚は「幸せ」についての思考のトレースの最後に、ある日新たな部分が加わったのを思い出していた。

コートの端で目を閉じ、息を吐き切った時にふいに聴こえた——軽い打球の音。

それが、きっかけだった。

その二日ほど前から、手塚はリハビリの一環として極限られた時間内でラケットを握ることを許されていた。左肩には当然まだ鈍い痛みや違和感があり、まだ球が打てる程回復していない。その事実が手塚を暗い海の淵へ追い遣ろうとするのを、大分スムーズになった「幸せ」についての思考を組み立てて漸く鎮めた。

奈落の底に落ちずに済んだ、安堵。

それでも——未だぎりぎりの淵に立たされているのは間違い無い。
だがしかし、今回は免れた。まだ、大丈夫だ。

身の中で渦巻く諸々に出来るだけ静かに覆いを掛けて、手塚が硬く
なった身体を緩めようと息を大きく息を吐きだした時だった。

パコン…

パコン…

（誰か……打ってるのか）

それまで意識していなかった音の方に手塚が目を向けると、少し離れたコートでトレーナーがネットを挟んだ相手に球出しをしていた。
単調な音の繰り返し。

ラケットを握った者は、ネットを越えワンバウンドした黄色い球を
ひとつひとつ、身体の動きを確かめるようにして丁寧に打ち返して
いる。

その時——コートの様子を見ながら、手塚は久し振りにラケットが
ボールを打つ音を聞いた気がしていた。

実際はそんな事無く、その音はずっと手塚の生活の傍に存在して
いた。ただ、無意識の内に手塚はなるべく音が聞こえる場所にいる
のを避けていた。力の足りない自分への忌々しさと焦燥を掻き立て
られたからだ。

だがその時は聞き慣れた馴染み深い音は苛烈な太陽と混ざり合って、
手塚に色褪せる事の無いあの試合の記憶を怒涛のように引きずり出
した。

「——ッ！」

熱に揺らぐコートは幻か。

あの日。

あの、鮮やかな瞬間。

高架下のコートで自分が目覚めさせた——あの少年。
越前リョーマ。

その時——本当は、彼の記憶だけが蘇ったのではない。

手塚がテニスを始めてからの沢山の思い出が音に触発されて、時系列も喜怒哀楽も関係無く溢れ出していた。

テニスの試合を生で観戦した日の興奮。ラケットを握り、初めて奪ったポイント。接戦の末の勝利の味。中学に入ってから事を漸く知った、仲間と力を合わせて戦う喜びとその心強さ。

そのどれが欠けても今の手塚はいない。自身がひとつひとつ積み上げてきた歴史だ。

ただ——それらの記憶の中で他の何にも紛れることなく、一際強烈なインパクトを放っていたのが彼だった。

（越前……）

一度溢れ出した越前との非公式な試合の記憶は、抗う間も無く出会うてからの数ヶ月を無作為に眼裏に映し出す。

手塚よりも二周りも小さい、いつそ清々しいくらいに生意気な少年。ポイントを取られて拗ねた顔、勝気な笑みに変わる瞬間。シャツで無造作に汗を拭う仕草。ラケットのグリップを握り締める時の、親指の付け根に走る緊張。絶好のショットが決まった時に見せる小さなガッツポーズと、帽子の鏝で隠し切れない口元の笑み。

『まだまだだね』

幼さの残る声と、背中越しに見せた不敵な笑顔。

何故こんな鮮やかな情景が自分の中に仕舞われているのを思い出すことすらなかったのか。

煌くダイヤの様な、無限の可能性を秘めた少年。彼はきつと——今日もあのしなやかな体を目一杯躍らせてボールを追いかけている。込み上げる何かに、手塚は胸をきつく締め付けられた。

「手塚君、大丈夫かい？肩が痛むのなら——」

ここに来てからの手塚専属のマネージャが、何かを堪えるように眉間に力を入れ微動だにしない手塚に声を掛けた。

「……大丈夫、です」

目の端が熱い。滲む。

汗を拭う振りをして、手塚はメガネを外しタオルに顔を押し付けた。手塚が見詰めていた先のコートでは、黄色い球が弾み続けている。

「——きみも、あそこに戻れるよ。必ず、必ずだ」

「……はい」

灼熱の太陽に肌を焦がされながら、手塚はゆっくりと顔を上げた。

（『ここ』と『そこ』は……繋がっているんだ）

精神がぶれそうになる度に繰り返される、自ら編み上げた言葉たち。それら自体は何も変わらなかったが、この日を境に結論の締め括りのイメージが変わった。

手塚は結論に辿り着く少し手前になると、自然と青学のメンバーを思い浮かべていた。

そして最後にはちらりと手塚を振り返る、越前の後姿を。

彼らの姿に手塚はどれ程の勇気を貰ったかわからない。

それは、探していたものがすぐ傍に存在していると偶然気付いた時の感覚に近い。離れて実感したのは、あそここそが自分の帰る場所であって、心の拠り所であるということ。

そして——それを幾度か繰り返した後に、更に気付かされた事があった。

一日分のリハビリのメニューをこなした後、昼間の熱気が籠るオレンジ色の自室に戻って来た時だ。

青学の事を考えているつもりでも、己の事しか見えていなかった。

そう感じた途端、手塚は猛烈な羞恥と情けなさに襲われた。

（俺は皆に支えられているくせに。これは怪我で負担を掛けるより酷いじゃないか…）

暫く身動きすら出来ないほど打ちのめされて、手塚は夕陽が差し込む壁際で、ひとり硬直していた。

（これでは——いけない）

手塚はぎこちない足取りでベッドの縁に座り込む。

たとえその場にいらなくても、自分は部長だ。柱を引き継いだ者だ。その責任を忘れて——自分の事だけで頭を一杯にしてしまうなんて。そこに存在していられないなら、いられないなりに出来る事がある筈だ。

「しっかりしろ」

手塚は己を叱咤する。

（広い視野を持て。客観的に、冷静になれ。彼らが自分にとって支えであるように、彼らにとって自分がどういう存在かを見失うな。

そこにいらなくても、彼らを支えられる、力になれる筈だ）

表面的な行動という点では何も変化は無い。彼に出来る、そして求められる事は唯ひとつ、肩の怪我を完治させることだけだ。その為には今日、昨日、一昨日…と同様にリハビリに励むしかない。

だが、これが契機となり手塚の精神状態は大きく変化した。青学の部長としての責任を改めて自覚した手塚は、これ以降本来の落ち着きを取り戻した。

回想2 i n N・Y・

（この状況を、大きな試合の流れだと思え）

実際に試合に出られるメンバー。テニスの技術やメンタル面も含めた各人の特徴。メンバーに対する他校の評価と、その評価が与える心理的な影響力。

青学と相手校のそれぞれの状況や、大会に対する意識。勝って当然だと迎え撃つ気の学校もいれば、我武者羅に格上の相手に勝ちにいかうとするものもいる。それらが生み出す勢いの差もあるだろう。

誰をどこにどう配置し、どのような意味を持たせるか。どんな効果が得られるか。リスクは。可能性は。どんな展開にすれば、狙った流れを引き寄せられるか。

これは一試合の中のゲームメイクに良く似ている。

サーブはどこへ打ち込み、どこでポイントを取るか。どうすれば相手の球をコントロールし自分の思惑通りの所に返球させられるか。そして――勝利を掴めるか。

（勝つためには、目先に惑わされてはいけない）

それは「怪我をおしてでも……」と逸りそうになる手塚が、自身に言い聞かせているのと同じ言葉だった。

目前の勝利を取りに行くか、選手生命を選ぶか。

冷静な部分ではこの状態では、本当に強い相手と遣り合えないのは判っている。そんな中途半端な手塚を誰も望んでいないという事も、それでも手塚が歯痒さに耐え兼ね、壁に拳を打ちつけたくなるのは、このメンバーで優勝を目指して戦えるのは今しかないからだ。

（冷静になれ）

最良の選択をするということは、難しい。

何が最良なのかは後にならないと判らない。たとえ本人に悔いが残らない選択だったとしても、その結果が周囲を悲しませるような事になれば、それは『最良』の選択だったとは言えないのではないのか。

（考える。俺には何が出来る？）

ひとりひとりの顔を思い出し、手塚は静かに自問する。

（お前には――）

記憶の中の少年が鮮やかに笑う。

（今の俺が、お前にしてやれることは）

覚醒させた越前は自らの世界を狭めていた扉を破り、新たな道へと足を踏み出した。

（見極めろ）

彼の事も、この先の事も。あらゆる可能性を考え、最良の選択をしなければならない。

（今後のお前に必要になるものは……）

そして手塚は――大きな決断を下した。

『今回のシングルス1は越前にしていただけませんか』

立海の現状では、シングルス1は間違いなく中学テニス界最強の真田だ。そして王者・立海がわざわざオーダーを弄ってくるとは考え難い。

その真田と――ほんの数ヶ月前まで小学生だった越前を戦わせる。そのイメージが脳内で閃いた瞬間、手塚は知らず深く眉を顰めていた。

その光景は手塚の本能では「可」だが、理性では「不可」だ。

どれだけ無謀と言われるオーダーなのか、いちいち他者から指摘さ

れるまでも無い。

いくら越前リョーマが桁外れに規格外で、技術やタフさを兼ね備えた選手だとしても、二人の間にはシヨットの威力を左右する体重やリーチの長さなどの歴然とした体格差が存在する。

越前はそれらのハンデをもとめ勝手に勝ち進んで来たが、真田は並大抵ではない。そしてあの二人がぶつかり合えば当然真剣勝負になり、真田は——本気で越前を叩きのめそうとするだろう。越前の選手生命さえ脅かす可能性もある。

（だが……）

自分の出来る事。

彼に必要な事。

あらゆる可能性と、この先に続く未来。

（この先を考えるなら、この機会を逃すべきではない）

越前は潰れはしない。たとえ試合の勝敗がどうであっても、真田と戦う事で現われる『壁』を乗り越えられる。

たった一度、越前と本気で向かい合ったあの試合が、手塚の下した決断の根拠だった。

立海との決勝戦——越前と真田との試合が終わった後、興奮気味の大石から関東大会優勝を報せる電話があった。普段冷静な大石が幾度か声を詰まらせながら、

『勝った、勝ったぞ手塚！越前は——本当に凄い奴だよ』

そして、竜崎からも。

『アイツは、お前の期待に見事応えおったよ』

（……来た）

受話器を握る手塚の左手が汗ばむ。決断を下すまで相当の葛藤と不安があったが、一方でそれらを軽々と呑み込こんでしまう程の、それを上回る第六感的な確信もあった。今日の試合で、手塚のその確

信が証明されたのだ。

（来た）

まだ殆どの人が気付いていないだろうが、越前が今日手にした結果は、皇帝と呼ばれる男に勝利したという事実よりもっと大切な意味がある。

越前が確実に『そこ』への道を目指し、進化している証なのだ。

（越前……）

酷く息苦しい。壁を破った越前にぞくぞくするような……得体の知れぬ感情が込み上げて来る。よくやったでも頑張ったでも無い、何か『皆、お前の帰りを待つとるよ、手塚』

結局——電話口では自分の思いを言葉に出来ず、受話器を下ろした後も手塚は暫くそこに立ち尽くしていた。

（越前）

手塚はただ、無性に彼に会いたいと思った。

窓を縦に貫く摩天楼を眺めながら、手塚は苦笑する。

あんな懐かしい夢を見たのは、今日、久々にプライベートで越前と会うからだ。

お互いの進路はバラバラになったかに見えて、実は重なっていた。手塚はプロへ、それから数年遅れて越前もまたプロの道を選んだ。

それ以降、越前とは所属するクラブの関係で一緒に合宿したり、同じ大会に出場したりと、日本に住んでいないのに意外に会う機会も多い。今日も少し前にメールの遣り取りの中で同じ日にニューヨークに居ると判り、偶には飲もうという話になった。

手塚が越前と飲むのは二回目だ。一回目は河村寿司で皆と集まった

時だった。オフシーズンで手塚と越前が揃って帰国したのと、その年に越前が漸く成人したのを祝い、大石が中心になって同窓会を開いてくれた時以来だ。

ほんの数日前に成人したばかりだというのに、越前は飲み慣れた様子で猪口を傾けていた。

「やつぱ、日本酒はいいツスね」

「キミ、さては未成年のクセに飲んでたね」

「時効っすよ」

「イける口みたいだな」

大石が空になった猪口に酒を注ぐ。

「よっしゃ越前、飲め！」

「タカさん、ビールも！」

離し立てる周囲をチラツと眺め回した彼は、先輩達のお咎めが無いのを確認しニヤツと笑う。並々と注がれたジョッキもさらっと空けて、美味そうに息を吐いた。

「うわー！オチビ生意気！！」

「もうチビじゃないっすよ。菊丸先輩とつくに抜いたし」

越前は何時の間にか180センチを越しているのに、その得意げな顔は昔のまま。周りが噴出したのは言うまでもない。めいめい思い出話に花を咲かせる。他愛無い会話は年月を一気に飛び越える力を持っているらしかった。

その同窓会か忘年会かお祝いか——最後はもう何の集まりか判らない状態だったが、まだ理性が残っている頃に近況報告をしあった。その時に手塚と越前が割と頻繁に連絡を取り合っているのを知って、皆が驚いていた。

「オレには全然メール返して来なかったくせに、随分筆マメになったもんだなあ」

「桃先輩、痛いッ！」

「ナマイキな奴め！」

「ギブギブ!!」

ふざけた桃城が片腕で越前を締め掛かる。殆ど力が入っていないが、そこへ酔っ払いの菊丸が乱入し――

「そうだ、ナマイキー！お仕置きー!!」

「ちょ…重！」

「ぎやはははは！オチビばんざーい!!」

（…そうだ、そこからぐちゃぐちゃになったんだ）

手塚は少し遠い目で、悲惨な光景を思い出していた。あの後菊丸は止めようとした大石や不二にも絡み……そこから先は記憶に無く、手塚にもどうやってあの騒ぎが収束したのかわからない。

（まあ…確かに自分でも意外だと思うが）

手塚は最初、プロに転向した越前の成長を見守るようなつもりで連絡を取っていた。それが徐々に同じ舞台で戦うライバルであり同士であり…と二人の関係が対等になるにつれて、他愛無い近況報告めいたメールの遣り取りが増えていった。

そう説明すると不二辺りからは「何を今更。手塚は昔っから越前を特別に意識してたよ。ライバルとしてね」と言われるが、多分――その辺は越前も、他のどのメンバーもお互い様だ。誰もが心強い仲間で、切磋琢磨に値するライバルだった。

青学でのあの時間は手塚にとっての原点であり、今も輝きを失わない大切な思い出だ。そしてその懐かしいものを思い返す中で、手塚はふと考え込む時がある。

（あの時、オレは越前に何と伝えたかったのだろうか）

あの、竜崎からの電話。何も言えずに下ろした受話器。言葉にならなかった感情。

抱え込んだものを有耶無耶にしたまま、手塚は皆の待つ東京へ、全国大会に戻る事になった。

一度彼と話をすれば相応しい言葉が浮かぶかとも思ったが、夏は手塚の思惑に見向きもせず猛スピードで駆け抜けていった。気付いた頃には手塚はプロを目指し海外留学を決めていたし、それぞれが各々の進路を選んでいたのである。

（今思えば、あれも麻痺の一種だ）

手塚は忙し過ぎて感情に手を付け損ねた。向き合う余裕もなく、何時の間にか自分でもそんな感情が存在していたことすら忘れていた。

（いや…一度だけあったな）

忘れかけていた「何か」を思い出したのに、やはり言葉に出来なかった。直ぐに蓋をしてしまったけれど何ヶ月もかけて自分の感情ひとつ言い表せないままなのかと、少し情けなく思った事が、あった。

再会

手塚が越前との待ち合わせ場所にいた店に入ると、自然と奥のカウンタに目が行った。スツールに腰掛けた青年がひとり、ゆったりと寛いでいる。

一見只の東洋系の青年だが、その鍛えられた体躯が発する雰囲気は明らかに一般人ではない。

青年は手塚の気配に直ぐに気付いたらしく、一瞬目が合うと軽く手を上げた。手塚は店員にコートを預け、案内を断ると少し薄暗い店内を進む。

「お久しぶりです」

立ち上がった越前は、すらりとした長身という言葉がとても似合うようになっていた。

「ああ、久しぶり。——珍しいじゃないか。まだ時間になってないのに」

「思ったより道が空いてたんで。タクシーのおじさんもびっくりしてたよ」

すぐ隣に座った越前がニヤツと笑ったような気がして、手塚は思わず勘繰る。

「…抜け出して来たんじゃないだろうな」

今日は越前が契約しているスポンサー企業の慈善活動——子供たちにプロと触れ合う機会を設けようという企画と、その後にクリスマスパーティーがあった。元々そのために越前はニューヨークに来る予定だったのだ。

「ちゃんと出席してきたって！メディアも来てたから証拠も残ってますよ」

「じゃああまり腹は減ってないか」

「まあ…パーティは途中で勘弁して貰いましたけど」

「それで飲み屋で料理もしっかりしてる店が良いって言ったんだな。」

——計画犯か」

ちらつと横目を向けると越前が少しばつの悪そうな顔をしている。

「おい」

「ういッス。腹減ってます。まだ酒も飲んでないっす」

正直な自己申告に、手塚は思わず笑ってしまう。

「じゃあ、適当に頼もう」

腹に入れる幾つかの料理と酒のオーダーを済ませると、手塚の横では越前が大きく息を吐いた。

「あーびびった」

「びびったって、お前な」

「もう流石に無いって頭では解ってるんだけど、うつかりすると今でも部長の『グラウンド十周！』が聞こえてくるんで」

「おいおい…俺はいつまでお前の部長なんだ」

「だってさ、あんたの印象が昔からちつとも変わらないんだもん。」

「やっぱり部長は部長だよ」

越前がひとり納得したように言った丁度その時、目の前にワイングラスが置かれた。

「じゃ、先輩とほぼ一年振りにオフで会えて、あんまり年取ってないことにカンパイ」

「お前…相変わらずだな」

「ジョークだつて。すんません」

「……」

「お互いこの世界で生き残って、上を目指せることに、乾杯」

「乾杯」

カチリと合わせたグラス。薄黄色の液体に口を付けながら、自分だつてちつとも変わってないじゃないかと手塚は思った。

料理が運ばれてきてからの越前は、良く飲んで食べた。

そういえば、越前の食べ方が海堂の次位に綺麗だった所為で気付き難かったが、彼は結構な大食漢だったと記憶している。一番年少だった事もあるだろうが、桃城の様にガツガツしていなかった所為で随分印象面で得をしていたのだろう。

「越前、これ食べたか」

「ちゃんと食つとけ」

と皆が構い、越前はその分け前をぺろりと平らげて平気な顔をしていた。

「それにしても、凄い食欲だな」

「たりまえっしょ。腹減つてたんすから」

「ならパーティにもう少し出て、何か入れて来れば良かったのに」

「そんな事したらここに辿り着けないっすよ。あいつら酔っ払つて、大騒ぎするのわかってるし」

「子供たちも一緒じゃ無いのか？クリスマスパーティだろ」

「それは途中まで。問題は子供が帰った後っすよ、後。二次会以降がほんと、素面じゃ無理。最後まで付き合ったら去年の河村寿司より酷いかもね。一次に全部出ちゃうと次に雪崩込むのは明らかなんで、抜けさして貰ったんだって」

会話の途中、余ってんなら下さいと越前は手塚の皿の肉を奪う。手塚もそこそこ食べているが、彼には敵いそうに無かった。

越前の腹がある程度満たされ、漸く二人の間でアルコールが主役になる。

幾つかの話題が一段落したところで、手塚はふと今朝方見た夢を口に上らせた。

「そういえば、全国大会の頃の夢を見たぞ」

ウイスキーを舐めていた越前が目を丸くし、そして呟く。

「全国…関東大会…うわ、懐かしいっすね」

「ああ」

あの一連の大会で激戦を繰り広げた何人かは既にプロになり、更に
もう何人かがプロへの転向を狙っている。プロとは違う道を選んだ
が、テニスを続けている者も多い。二人とも、日本に帰国する時は
彼らと試合をするのが楽しみの一つになっている。

「真田さんとは大会で会うけど、跡部さんとかどうしてるんすか」

「アイツは今パリの大学院にいる」

「え、じゃあ不二先輩も知ってんのかな。今フランスでしょ」

「その不二から聞いたんだ」

「相変わらずオレ様っすかね」

「相変わらずだそうだ」

今度連絡取ってみよう、と目を細めた越前が笑う。多少酔っている
のか、頬の辺りが微かに赤い。その横顔は手塚にとって少し見慣れ
ない表情だった。

越前がゆっくりとグラスを傾け、琥珀色の液体が喉の動きに合わせ
て微かに波打つ。

「青学か…。先輩はあの時のままだね。ね、部長？」

身体を傾け、越前はゆるりと笑った。

「ねえ、もう出会えた？」

「は？」

「あんたの、綺麗な理由の人に」

「何だ、それは」

「忘れたんすか？不二先輩の家で全国の打ち上げやった時に言っ
たじゃん」

「あ…ああ、あの話か」

手塚は暫くして、越前の言わんとしている過去を思い出した。
それは今朝思い出したものより、時間的に更に先の話だ。

「なんだ、まだ覚えてたのか？あれは別に——テニスとは関係ない話題だっただろう」

「そりゃ……ねえ？」

思わせ振りに越前が視線を超越す。含みのあるその笑顔にふいに時間が遡る気がして、手塚はドキリとした。

「恥ずかしい話題を蒸し返すなよ」

「どうして？オレ、あの時ガツンと来たよ。今でも——影響されると思う」

「影響？」

お前が？と言外に言いたげな手塚の声音に、越前は喉を鳴らすようにして苦笑した。

「俺、結構先輩から色んな影響を受けたと思うよ。テニスでも——それ以外でもさ。今だから素直に言えるけど」

テニスで影響を与えたのは誰が見ても明らかだった。手塚自身、過去の越前の発言から、彼が手塚から影響を受けたと認めている事も知っている。

だが、テニス関係以外の事でそれほど彼に大きな影響を与えたと手塚は思っていなかった。

「オレが影響受けるのって、そんなに意外っすか？」

「…意外というか…むしろ、あの話題をお前が覚えている事に驚いた」

「失礼っすよ」

「あ——そういう意味じゃ無くてだな。そんなに大層な話じゃ無かっただろう？皆ぐちゃぐちゃで…」

王者・立海を二度に渡って破り、青学は全国大会を優勝で飾った。大会の台風どころか竜巻の目と評された彼らの周囲が漸く静かになった頃、改めてレギュラーメンバーだけで打ち上げをした。打ち上げといっても私的なものだから部費は出ない。ジュースと菓子類、

そして父母からの差し入れなどを持ち寄って開いたささやかなものだった。

酒類厳禁との通達に最初、ジュースで酔えるか！と騒いでいた桃城と菊丸も、気の置けない雰囲気には酔える人種だったらしく、しつかり出来上がった頃だ。越前が、爆弾発言をしたのは。

「ねえ、どうして部長はそう綺麗なんすか」

手塚の向かいのソファで、紫色のジュースを入れたグラスを弄んでいた一年生は、じつ…と手塚を見詰めながらそう言った。言われた手塚は飲みかけのウーロン茶を噴出しそうになり、激しく咽込む。手塚の横に座った乾がメガネを光らせ、面白そうに笑いながら背中を叩いていた。

「酔ってるのか！？誰だ酒を持ち込んで越前に飲ました奴は！」

「酔ってないツスよ！あーええと、言い方がまずかったのかな。何だっけ？シヨサ？タチフルマイ、で良かったっすか？」

越前は首を傾げ、手塚ではなく隣の乾に自分の日本語の確認をする。

「それは外見——ああ、どちらも外見の範疇に入るが、「容姿」という意味よりも「行動や姿勢」の美しさってことかな？」

「そうそう。それに精神性も加えて」

「ふむ、精神性ねえ」

「見た目も勿論、ぴしっとしてる姿勢は美しいと思うけど、それだけじゃなくて。ええと、存在のあり方がちょっと他に無いっていいのか、やっぱり日本語だと——この言葉しか思いつかないっす。美しいとか綺麗だって思ったから。オレは部長を見ると、朝の空気や水みたい——本気のコートに立った時みたいにきゅっと引き締まる。部長は…綺麗に、綺麗な動作で動こうと思ってる訳じゃないんでしょ。だから何考えて生きてたら、そうなるのかなって」

そこで越前は照れた様に頬を掻いた。

「あー、ボキャブラリー増やさないと駄目っすね。うまく言えない」
「……だいたい言いたいことは理解できたが。聞いていて恥ずかしい気持ちになる単語の羅列だぞ、それは」

手塚の言葉を怪訝に思ったのか、越前はどう恥ずかしいのと問いかけたが、目の前の手塚が片手で口元を覆うのを見て黙った。咽込んだ所為か照れているのか――越前には判断できなかったが、手塚の頬が確かに少し紅い事に気付いたのだ。

「なんだ、伝わっちゃったの？」

乾が二人を見比べるようにして言う。

「だいたいは、な」

「もし伝わってなかったら丁寧に翻訳してやろうと思ったのに。ふふ…手塚が越前のあの台詞に息が出来なくなるくらい動揺するとは思わなかった。良いデータが取れたよ」

手塚は勝手にしろと思いつながら、グラスに残っていたウーロン茶を一気に飲み干す。

「越前は将来タラシになりそうだね」

越前の隣で遣り取りを観察していた不二が、にやにやしながら口を挟む。

「なんないっすよ。むしろそれは不二先輩の方でしょ」

「いいや、君は天然だね。僕は計算」

「自分がタラシになるって認めるんすか」

「やるとしたら、だよ。やらなかったら僕は無罪。君は無自覚だから余計タチワル」

「なんすか、それ」

口を尖らせた越前は挟まった会話に気を逸らせることなく、再び手塚の方へ向き直った。どうなの、と窺う目だったから、手塚は衝撃で少し回転が鈍くなった頭を絞る。

「何を考えてと言われても難しいんだが——忘れないように、思っている言葉なら」

「え？——うわッ!？」

クラッカーの破裂音が連続して響き渡り、吃驚した越前が身を竦める。桃城の悲鳴と河村の豪快な笑い声。菊丸がオレもやる!と飛び込む。

「桃オ!覚悟だ!！」

「うわ、先輩!人に向けちゃ駄目ッすよ」

瞬く間に火薬の臭いと濁った空気が立ち籠め、リビングは急激に退廃的な様相を醸し出していた。

「ちよつと、エージ!遣り過ぎでしょ」

「そうだぞ、ここは不二の家なんだからな。ご迷惑にならないように!こら!」

ストップパーの不二と大石が菊丸の暴走を止めに入るが、それが余計に菊丸を刺激したようだ。

ソファに座ったままの三人は呆れたように、その様子を眺めていた。少し前まで河村に寿司の話聞いていた筈の海堂はじりじりと壁際に後ずさっている。堪り兼ねたという表情で必死にアイコンタクトを図ってきた後輩を乾が手招きして救出した。

ソファに陣取った面々は、ソファとその後ろは別世界として扱うことに決め込む。多少の騒音が何だという気持ちで、手塚も越前と話を続ける事にした。

「——昔な、まだ小学生になったばかりの頃だと思うんだが」

喧騒から手塚の声を探し出すように、越前がテーブルに身を乗り出す。

「祖母に言われたことがあったんだ。『恥じないように生きなさい』と」

「恥じないように?」

「ああ」

手塚の祖母は幼い孫を正座させ、その正面に居住まいを正して座っていた。

それが一体どういうシチュエーションで、そういう話になったのかまでは手塚も覚えていない。ただ祖母の背後の障子から溢れる光が白く、眩しかった記憶がある。

彼女は手塚に、ひとつひとつの単語を噛み締めるようにして諭した。

ロマンチストの恋はリアリストの自律になるか

所作。

立ち居振る舞い。

精神性。

手塚のそれらを、越前に「引き締まったような」と感じさせた理由は、恐らく過去の祖母のあの言葉が原因だろうと手塚は思った。

『これから先、きっと沢山の人と出会うでしょう。その中できっとあなたにとって特別な人たちに出会える。人生の素晴らしい友人にきつと出会える。その人たちに出会った時に、今までの自分を振り返って、彼らに相応しくないとと思うことの無いようになさい。共に胸を張って、友人であることを誇り、誇られるような人間にな리なさい』

当時、随分難しいことを言うなと手塚は子供心に思ったのだが、祖母の言葉がとても大切なものだということは理解出来た。

（綺麗、か……）

手塚は越前自身が指摘したように「美しく在ろう」等と思っている訳ではない。

ただ、祖母の言葉を聞いて以来、具体的にどうすれば良いのか――要は「恥じない生き方」とは何かを考えるようにはなった。その方向性が定まるまでには数年間を要したが、ある日――手塚はひとつの言葉を見つけた。

「祖母は『自律しろ』という意味で言ったんだ、と俺なりに解釈している」

「自律……？ああ、なるほど」

越前の顔には次第に納得の色が拡がり、そのまま表情を綻ばせた。

「それで部長はブレないんだ。——それって何かさ」

手塚を真つ直ぐに映す越前の大きな目には試合の時の挑発的な色は無い。射る様にキツイものでもないが、ひとつ、誰にも揺るがせない芯のようなものが宿っていた。

「何か——あんたがまだ会った事も無い誰かに、恋してるみたいっすね」

横で何とはなしに二人の会話を聞いていたのであろう海堂が、ぎよつと身を引く。

「海堂、それ驚き過ぎだから。手塚だつて人間なんだ。恋もするさ」

「す、スンマセン！」

手塚と海堂の間に座っていた乾が逆光メガネを光らせ、赤面した海堂の肩をぽんと叩くと、がばつと頭を下げた。

「……」

視線を明後日の方に逸らしたまま、海堂は手に持っていたウーロン茶を物凄い勢いで飲み干してゆく。

「あ、のなあ……越前」

手塚は少し声が怪しかったが——対外的にはギリギリセーフだった。越前の台詞が予想外で、反応が追いつかなかったのが幸いした。

「頼むから、もう少し日本語も勉強してくれ」

「げっ、何で！？オレ、これはちゃんとマトリタ言葉で言えたと思つたのに！」

「お前……何故自律が恋なんだ？」

「部長の雰囲気、誰かに恋してるみたい、ツス！」

力説に鳥肌が立ちそうになったのは言われた本人だ。

「……やっぱり、日本語勉強しろ」

「う…だって、今現在出会えてる友人と、この先会える大切な人の為、なんでしょ」

「そうだ。それは恋じゃないだろう」

越前はしきりに首を捻る。

「違うのかな…たとえば今大切に思ってる人たちに、この先更に誰かが加わってもおかしくないツスよね」

「ああ」

「それって、未来——想像でしょ？まだ会ってないけど、この先会える人を想って、恥じないような生き方をするって事じゃないんすか」

「そこまでは、お前の言いたい事が解ってると思うんだが」

「だから——まだ会ってないけど、会えるかもしれない大切な人の中に、もっと特別になる人がいる可能性だってあるじゃん」

「……」

「それでさっきの『まだ会った事も無い誰かに、恋してるみたい』に繋がるわけかい？」

「そうツス。解る？乾先輩は」

「何と無くね。手塚のお祖母さんは『友人』という表現を使ったが、それを『大切な人』と置き換えれば、越前の表現も解ると思うよ」

「別に——俺は特定の誰かの為にそうしている訳じゃない。もっと広い意味だ」

低い声で呟いた手塚を乾が指差し、苦笑した。

「ただね、越前。手塚にそれを『恋』といってしまうと、難しいんじゃないかな。手塚にとつての『恋』という言葉の定義と、君の定義をまず揃えないと」

「そうみたいっすね。オレは別格とか、特別って意味で使ってるけど、部長にとつて『恋』は——『特定』の誰かへ向けるモノって意識が強いのかな」

「そのようだね。君のイメージだとその言葉に相応しいのは、そうだな…ピラミッドの頂点みたいなものか。勿論それも『特定の人』」

「ただ——きつとその頂点は、他の人とはかけ離れた高さに位置してるんだろ？」

「んー改めて言われると、そうっすね。別格、っすから」

「手塚は——勿論このカタブツの事だから、『恋』に相応しい言葉の相手は特定で別格の人間になるんだろうけど。君みたいなピラミッド構想の『大切な人間』の関係の中で、その言葉を考えてはいない。隔離、だな。そこは一般の『大切な人』のルールからも離れた飛び地だ。

だから今回みたいな、大勢の人間を対象にし得るもので、手塚相手にその言葉を使ってしまうと——ズレが生じる」

二人が解ったような会話をしているのに、置いていかれそうになった手塚は窺うように口を挟む。

「だから……友人、だろう？」

「可能性としてはアリだと思うよ、手塚。友人の中に、越前のいう『恋』——別格というのか、特別に大切に想う相手ができてもおかしくないじゃないか。最初は友人のカテゴリに入っていても、いつかはお前の神聖な飛び地に隔離されるかもしれない」

「神聖な飛び地……？ 妙な表現ばかりだな。しかも隔離ってなんだ」

「そこに入れるのは特定の人だろ。お前、実は結構独占欲は強いと見た」

にたにたと薄笑う乾を手塚は然程相手にしなかった。

「勝手に決め付けるな。そもそもが友人というカテゴリであっても、そこから先は……可能性が無い訳ではない……か。成程。考えた事も無かったが」

「だとしたら、自律した姿勢を、『恋してるみたい』と評されるのはかなり強烈だっただろうね」

「自律するのは特定の誰かの為というより、それが自分自身の為だと考える事はあった」

ほう、と乾が興味深そうな声で応じ、手塚の心理を分析しようと幾

つかの質問を投げかける。越前は暫く二人の間の会話を大人しく聞いていたが、ぽつりと呟いた。

「――部長はね。きつとそのつもりなんだ」

ん、と二人が越前に意識を戻すと、彼はどこか遠くを、猫の様な瞳で見詰めていた。

「……なんだ、越前。つもりって」

「だって、きつともう、この世界のどこかに居る。たとえ特定の誰かの為じゃなくて、あんたが自分の為に『恥じない生き方』をしてるとしても――同じだよ」

越前は手に持っていたグラスを傾けて、フアンタを飲み干す。ふうと満足げに呼吸を取り戻しソファに背を預けた。手塚にはその表情が随分と大人びて映り、思わずまじまじと見詰めてしまった。

「……何すか」

「越前、その特別の価値観をもっと詳しく話してくれ」

「え？」

ずいとしを乗り出した乾に、越前は居心地悪そうに身じろぐ。

「君は、言葉を借りるなら、『格別』の相手に会えるとは限ってないって考えてるんだね」

「ん――そりゃそうでしょ？」

「現実的だなあ」

「出来れば会いたいけど。でもこの世界に居るんだと思えば、会えないまま終わっちゃうんだとしても最期の一瞬まで気は抜けないツスよ」

「最期？」

「だってホントに最後の最後で会えたらどうするんすか」

「オチビ、カッコ付けだなー！」

「な、ちょっとー！！菊丸先輩重い！」

越前が座っていたソファの背凭れの向こうから、菊丸がでろんと彼

に押し掛かって乱入してきた。やれやれと、出来上がった菊丸を引き剥がしながら、越前を窒息寸前から救出した不二が言う。

「可愛いな、越前。信じ込んでない癖に、そう言えちゃうの」

「…なんスか、突然」

「キミは現実的なんだな。僕らの周りの大概の女の子達は盲目的に信じてるよ。きっと会えるってね」

「オレ、オンナじゃないっす」

「当たり前じゃない。まあ、性別なんて些細な事だし、この際置いておいて良いよ。最後の最後までどうなるかわからないのに、どうなるかわからないからこそ——そういうのが、ボク的に好みつていうか、凄く可愛いってワケ」

越前は露骨に顔を顰めたが、乾はうつすら笑いながら不二との会話に加わった。

「じゃあ信じ込んでるのは可愛くないのかい？」

「信じ込んでない方が、可愛いね。でもねえ、会えるって信じ込んでるのはまた違った方向で、ちっとも可愛くないのもここにいますよ。ね、手塚」

「……」

「手塚は現実主義者だしね。それを除いても色々な部分で可愛さの欠片も無いよね」

「そうだにゃー」

「現実的なのは可愛くて、妄信者と現実主義者は可愛くない…ふむ」「可愛くないでしょ」

「ないない。つかむしろ、手塚にその言葉自体が似合わないって！」

突如割り込んで来た割に大きな顔をしている六組コンビに、手塚は今更ながら戸惑っていた。

「そもそもお前たち、話をどこから聞いてたんだ？」

「どこでも良いじゃない」

手塚の疑問をあつさりと退けて、不二が元の位置——越前の隣に戻った。

「キミは大切な友人には出合えると信じていても、その中の特別——越前の言葉を借りるなら『恋』する相手に会えるって信じてないんだね」

「…元々、今してるのはそういう話じゃないだろう。俺が自律しようと思うのは誰かの為にという意識じゃないという話で…」

「つまんないなあ。越前の可愛さを見習いなよ。キミが余程のロリコンじゃない限り、もうこの世界のどこかにいる…素晴らしいじゃない。鈍いキミが気付いてないだけで、本当は既に出会ってるかもしれないんだよ。それにね、たとえ一生会えないままとしても、それだけで世界が愛しくならないかい？」

「えー！オレだったら絶対会いたい」

「ボクも出来れば会いたいな。でも…もし逢えてもその人がそうだってわからない事もあるんだよね。困ったな」

手塚は喋りだしたら止まらない不二と菊丸の勢いに押され、ふうつと息を吐いた。

この二人が揃うと、話があっちこちに激しく飛ぶと学習している。

「可愛くない。つまんない、か。散々な言われようだね、手塚」

「…いつもの事だろ」

苦笑した乾が空になっていた手塚のグラスにペットボトルから新たな茶を注ぐ。

労うというよりむしろ、暫く好きにさせておけという意味だろうと判断し、手塚はぼんやりと二人の運命の人トークを聞いていた。

会えるか、会えないか。二人の議論は急ピッチで盛り上がる。

「オチビ、どう思う！？オレ絶対絶対会いたいんだけど！！会えないのってどう思う！？」

菊丸に後ろからぐいっつと顔を覗き込まれた越前は、迷惑そうにしな

がらも飄々としていた。

「それでも、どこかに居ることには変わりないっすよ」
目を輝かせた菊丸がピー——ツツと高い指笛を吹く。

「よく言った、オチビー！男前！！」

「ちょ……だから思いつ切抱きつくのやめて下さい！苦しいって言うでしょ」

越前が息を切らしながら菊丸を剥がす。そこで、向かいのソファに座った手塚のまじまじとした視線に気付いたらしい。

「……なんスか、部長」

「いや……お前たち……ロマンチストだったんだな」

思わず零れ落ちた手塚の言葉に、オレたちロマンチストと手を取り合ってふざけ合う六組コンビ。

その隣で越前がまるで先ほどの手塚のように、新たに注ぎ足して飲んでいたファンタを盛大に噴出していた。

ラブレター

「今思い出しても恥ずかしいな、アレは……」
手塚は眉間の皺を深めながら、呟く。

『ねえ、どうして部長はそう綺麗なんすか』

確かに、越前と手塚はそんな話をした日があった。

「しかも恋してるって何だ、恋してるって」

「何でそこで恥ずかしがるのか、オレにはやっぱり解らないけど。」

——オレさ、あの言葉にはかなりショック受けたっすよ」

「どんな？」

「自覚したってどういうのかな。オレも、ちゃんと——恥ずかしくないようにしなきゃって思った」

越前がカウンタの上にグラスを戻すと、氷の触れ合う澄んだ音が響く。

「綺麗な理由の人に、もう会えた？」

越前はもう一度、手塚に尋ねた。

「あれは……本当にそういった意味じゃないんだが」

「ん、知ってる」

「では、何故そんなにこだわるんだ？」

「そうだなあ……あんたが、ずっと変わらないで綺麗なままだから、かな」

「……」

屈託無く笑う越前が眩しく、手塚は苦いものを飲み込むようにしてグラスの中身を喉の奥に流し込んだ。

あれから更に店を二つ梯子し、流石にもうお開きにしようという流れになったのは良いが、店員に呼んで貰ったタクシーの中で問題が発覚した。取り敢えず自分より酔っ払っている越前を帰すのが先だ、と行き先をドライバーに告げようとして手塚はたと気付く。

「どこに泊まるんだ？」

「あー、まだ宿取ってないんで、泊めてください」

「取ってないってどういう事だ。仕事で来たならある筈だろ」

「マネージャが手配してくれてたんすけど、もしかしたら朝まで飲むかもって断った」

「おい……」

「つか、今何言われても無理。眠いし動けない」

どこに行く気だとバックミラーで伺う運転手に自分のホテルの名前を告げ、手塚はタクシーの中から少々怪しい呂律でホテルに電話をし、ツインの部屋に変えて貰う手続きをする破目になった。

「こら、寝るな！とにかく歩け！」

二人共足元が危うい。下手をするとそのまま眠りに落ちそうな越前を叱咤しながら、何とか部屋に辿り着いた。

前回の様子から手塚と同様越前はそこそ酒に強いのだと思っていたが、今回はどうも回り方が早いようだ。うつらうつらとした越前をベッドに放り込み、備え付けの冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出す。

「飲んでおけよ。脱水起すぞ」

「ウイッス」

うつすらと目を開けた越前が手を伸ばす。そのまま手渡したが、キヤップを外そうとする越前の手付きは覚束無い。手塚はボトルを奪ってキヤップを外し渡し直してやった。相当喉が渴いていたらしく

手塚が自分のボトルの封を切る頃には、喉を鳴らしながら殆ど一気に中身を飲み干してしまっていた。

「すみません…ちよつと寝る…」

言いながら既に瞼は閉じられ、腕はシーツをごそごそと掻き集めている。

「全く……」

直ぐに寝息が聞こえ始めて、手塚は脱力したように笑いを漏らす。懐かしい光景。この後輩は昔から寝穢い事でも有名だった。

『あんたの、綺麗なわけ』

越前のこの台詞も懐かしい。そういえば手塚は面と向かって、あんなことを言われたのは初めてだった。

「——そういうお前は、もう会えたのか？」

もう聞こえていないと知りつつ、手塚は越前に問いかける。

自律しなければ、という思いが映し出された手塚の姿勢を見て、美しいと言った越前。そして、誰かに恋をしているようだとも。

（あの時…最後の最後まで気が抜けないとか何とか——凄い事を言っていたが、あの話がそれ程お前に影響を与えていたとはな）

自覚したという越前。恐らく彼は——彼の「格別」の相手を見つけても気を抜く事はないのだろうと手塚は思った。

『だって、きつともう、この世界のどこかに居る。たとえ特定の誰かの為じゃなくて、自分の為に『恥じない生き方』をしてるとしても——同じだよ』

最期までと言える越前にとっては、同じなのだろう。

『美しいとか綺麗だって思ってたから』

あの時、越前に真つ直ぐに見詰められながら言われて、手塚は心の奥底の鈍い流れの渦と、それを取り巻く素直な部分が連鎖反応した。少し気色悪い——人には見せる心算の無い、あまり良くない感情と照れ臭さが齎す羞恥が湧き上がったのを、手塚自身だけが知っている。

（越前は俺を誤解している）

今日、改めて越前に『もう会えたか』と訊かれ、何故あの時、照れ臭さ以上に越前の評価を後ろめたく思ったのか、手塚はやっと理解した。

（——お前は俺が何を考えていたのか知らないから、そう思ったただけだ）

もし、彼以外の人に手塚の姿勢が美しい等と言われても、手塚は気付かなかっただろう。多少面食らったろうが、奥底に潜むものに目を向けることはなかった。

手塚の奥底にある、もの。それこそが後ろめたさの原因だ。

あの関東大会決勝前夜。手塚は越前にとって最良の選択をした筈だった。

越前が全国で勝ち上がるために、そしてこれからのために必要な事を真田との試合で掴めると手塚は思った。

『俺が打ち返せない球を打って来い!!』

越前の本来の力量を発揮するのを妨げている壁。それは高架下で行われた手塚とのあの試合で、崩壊する兆しを見せた。

『打ってやるさ!!』

越前がたった一球、手塚の挑発に引き摺られるようにして放ったショット。それが——壁を打ち破る鎬矢だった。

追い詰められた極限で尚、諦めずに自分の可能性を抉じ開ける強さ。誰かの真似でなく、自分の知恵や勇氣に賭ける強さ。そしてそこそがギリギリの勝負で運を引き寄せる事があると手塚は知っている。だからこそ、上を目指すなら越前は進化しなければいけない。

だがあの当時、壁を完全に崩させるかどうかは難しい問題だった。壁を崩し切らなくても——越前は関東大会クラスでなら勝てる。

（全国への道はもう開いている。焦る必要はない。目標は全国だ。最悪関東で立海に優勝を渡しても、全国で優勝できれば大和部長との約束を果たせる。越前の選手生命を潰す可能性があるかと解っていて、それでもシングルス1に入れるのが最良の選択か？失敗すれば越前にも、青学の為にもマイナスになるぞ）

安全策を採ろうとするその一方で、もうひとりの手塚が囁く。

（——だが…このままでは越前が全国で勝ち続けるのは難しい。青学のためにも、越前の覚醒は必要だ。あいつを完全に覚醒させるには、並の負荷では足りない…そういった意味で真田との試合は——壁を崩す上で願っても無いチャンスだ）

どうすればいい？

最良の選択とは、何だ。

手塚は青学の部長として、彼らを導かなければならない。

幾つもの声が生まれては沈み、絡み合うようにして渦巻いていた。

結果として手塚の部長としての決断は、最高の形で現れた。あのタイミングで彼と真田との試合が無ければ、青学の全国制覇は難しかったと手塚は考えている。

そして何より、『青学のため』という点を抜きにしても、あの試合は越前には大きな収穫だった。

『あんたに出会ってなかったら、オレ、今頃どうなってたかわかんないッスね』

越前がプロに転向し、大きめの大会でノーシードから勝ち上がり初優勝を飾った後の事だ。

手塚は同じ大会には出ていなかったが越前の出る試合をチェックしていた。優勝の報せに、祝いの電話を入れ——少しハイになっているらしい彼に、照れ臭そうな声でそう告白された。

『親父を倒すためにテニスを続けていたら、多分ここにいなかったと思う。部長が気付かせてくれなかったら——きっと、オレはテニスが楽しいって事も忘れて半端に燻ってたんだろうなって。だから——あんたには、凄く感謝してる』

それは、手塚が過去に幾つか重ねた越前のための選択を、彼自身がプラスと受け止めてくれていたという事だった。

だが——つい数時間前に手塚は気付いてしまった。手塚は、自身にとっての最良の選択をしたただけだ。

『ここ』まで越前を引き摺り上げたい。
越前と同じ舞台で戦いたい。

それが、手塚の奥底に潜んでいた欲だ。
(俺は自分の為に、お前を覚醒させたかったんだ)

青学のため。

そして部の一員である越前のため。

それらが大義名分にし、手塚は無意識の内に、あの選択の中に己の欲を紛れ込ませていた。

（姿勢や精神性が綺麗だった？）

「それは違うぞ、越前」

手塚の自嘲めいた独り言に、勿論応えは無い。向かいのベッドで越前は平和そうな顔をして深い眠りに落ちている。手塚が昔見た寝顔は本当に子供のようだったのに、今はその穏やかな顔の中にも精悍さが加わっていた。ただ枕を抱き込んだ体勢で眠るのは合宿で見かけた昔のままで、苦笑してしまう。

特別生意気で、可愛い後輩。

「騙されてるぞ、お前」

手塚は自分の欲を優先させた事実気付きたくなかった。そんな自分を大切な人たちに知られたくなかった。完璧な（今思うと手塚自身その青臭さにぞっとするが）人間で在りたいと思ったのだ。青学の部長として、彼らに恥じない人間でいたいと。

（あの時…俺は本当は最良の選択が自分のものだ気付いていたんだろう）

それを欲の対象となった越前本人に『美しい』と評されたから、後ろめたかった。

だから——気付かない振りをし続けた。

手塚は恐らく初めて彼のプレイを見た——ぼろぼろのラケットで相手を鮮やかに手玉にとってみせたあの日から、彼の可能性とそのプレイに魅了されていたのだ。

たとえ今、その輝きに曇りがあってもあいつは本物だ

手塚は越前が自分と同じ所まで上ってくる未来を直感していた。その未来がどうしても欲しかった。

まだ足りない。けれど、必ず越前は――来る

その予感はずいぶん真田との試合でより現実味を帯びる。越前は階段を跳び越えるようにして、手塚の背を追ってきた。あの時、手塚を支配した感情の正体は、越前という存在への歓喜と感謝に他ならない。

そして再び手塚がその感情を強く意識したのは、留学を間近に控えたある日の事だった。

『いずれオレも、あんたと同じコートに立つよ』
静かな声とは裏腹に、強い意志を映す瞳。越前は真つ直ぐに手塚と対峙していた。

（越前は、俺を追って来る）
近い未来への胸が躍るような期待と、打ち上げの日に感じた複雑な感情が水面下で蠢いていたが、手塚の純粹で素直な部分はそれに蓋をした。

越前の視線が逸らされる事無く手塚に向けられている。その事実の方が、手塚には重大な意味を持っていた。

（俺はお前に救われた）

手塚はサイドボードに眼鏡を預け、ベッドに仰向けに身を投げ出す。視界に広がる高い天井は、眼鏡を外したのと酔っているのが重なってか、微かに黄味を帯びて滲んでいる。横になった途端目蓋が一気に重くなったように感じ、手塚は素直に従った。
暗くなる視界。

睨越しに天井に点された暖かな光の気配。

（あの時は、目を閉じる事が——眠る事が怖かったんだ）

宮崎でのリハビリ生活の中で、手塚は今朝の悪夢を繰り返し見た。手塚はもう、この世界は綺麗ごとだけでは済まないと知っていた。夢の中に立ち現れる過去の不穏な影は克服した筈の奪われる恐怖を掻き立てる。競争という名を借りた妬みが手塚に牙を向く。

幾ら才能があっても、哀しいもんだな。

今のお前になら勝てるかもしれない。

ナマイキなんだよ、お前。先輩を差し置いて。邪魔だ。

おまえなんか、おまえさえいなければ。

記憶の中の切り捨てた価値の無い、くだらないものが、ここぞとばかりに手塚に喰らいつく。

お前自身がやってきたことじゃないか。弱いものは切り捨てられて、強いものが残るんだろう。

勝てないなら、そこからだけ。

そこにお前の場所は無いんだ。

夢は見るもの。

夢は破れるもの。

お前の腕はもう使えない。

夢の中で手塚は、違う、まだやれると叫ぶ。

こんなことで。

こんなところで。

コートに落ちたラケットへ、手塚は激痛が走る肩を押さえながら左腕を伸ばす。漸く触れたグリップを握ろうとする指先が異常に冷たい。肘そして肩へと急速に伝播する寒気は手塚の左腕を凍り付かせる。動かなくなる。氷のような冷たい腕に爪を立てても、痛みすら感じない。

ほら、もうおしまいだ。

絶望に立ち竦む瞬間——手塚は冷や汗の張り付く身体で飛び起きる。震える掌で腕をなぞり現実を確かめながら、手塚は幸せについての思考をのろのろと巡らす。毎日同じ事を繰り返したが、自分の精神力について脆いなど感じたことは無く、むしろ強いのだと思っていた。そう信じる事で手塚は自分を保っていたのかもしれない。幸せとは何かと捏ね回し、くだらない妬みや弱さに付け込まれそうになる自身を『恥じない生き方』を選ぶ事でコントロールしようとしていた。

だが必死に己を律しようとしても、夢の中で囃し立てる悪意の声は渦巻くばかりだ。その中——テニスコートで呼び起こされたあの少年の記憶は、一筋の光のようだった。

幸せの思考の最後に蘇る、越前の姿。

それは何時の頃にか、圧倒的な存在感で手塚の内を占めていた。

幸せとは対極の状態だとしても、飲み込まれてはいけない。あの凜とした背が振り向いた時に、きちんと目を合わせられるような人間

でいたい。

その念が当時の手塚の精神の均衡を保つ命綱になっていた。今でも、越前と目を合わせていられる存在でいたいという想いと、彼が自分を追って同じ舞台に現われた喜びは手塚の中で変わっていない。

光を見つけたから。

閉ざされた視界に、眠りを委ねたとしても恐くはない。

すぐ横に微かな寝息が聞こえる。

冬だというのに、ここは暖かい。

今ここに存在するもののあまりの平和さに、手塚は込み上げる笑いと、何故か滲む涙を堪えなかった。

（ああ——気付いてしまった）

越前の存在が、彼に向けた想いが手塚を形作ってきたのだとしたら。

手塚は——ずっと越前に恋をしていた。

Fin.

ラブレター（後書き）

手塚のぐるぐるとまどろっこしい話をここまで読んで下さり、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548f/>

自分的ラブレター

2010年10月16日05時09分発行